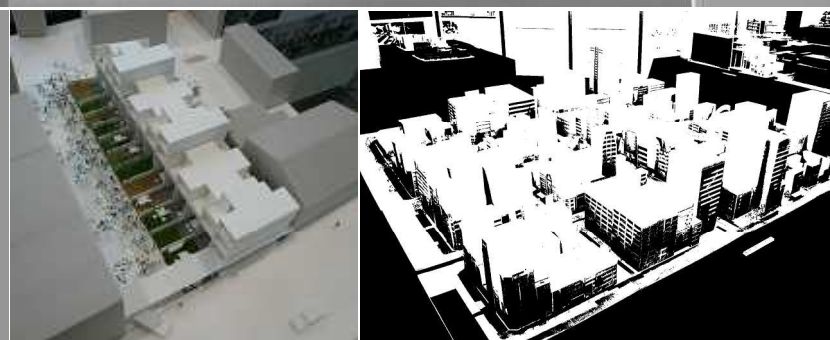


2008 年度 NUI レポート

都市に住む

～次世代に引き継ぐ魅力ある都市～



(財)名古屋都市センター

協力: 大学建築系研究室、名古屋建築会議、都市環境デザイン会議

シンポジウム: (社)日本建築学会東海支部都市計画委員会と共催



名古屋都市センターでは調査研究のメインテーマを平成 20 年度から「持続可能なNAGOYAへの変革～次世代に引き継ぐ魅力ある都市～」としました。これは、全国的には人口減少期に入らる中で、都市を考ふる視点がこれまでの拡大する都市づくりから持続可能な都市づくりに移っていることを明確化し研究に取り組む考えを示したものです。(財)名古屋都市センターは行政、大学、市民と連携し調査研究を進めていますが、今回、これらの研究成果をわかりやすく市民に展示し、これからの都市のあり方について考えていくための企画展を行いました。この報告書は、そのテーマとして取り上げた「都市に住む」ということについて、これまでの調査研究で明らかになった現状、課題を踏まえ、大学研究室とのネットワークにより次世代の都市型住宅の提案をめざした取り組みの記録をまとめたものです。

この取り組みについては次年度以降も継続していく予定ですので、この報告書をたたき台にさらにステップアップしていくことを期待します。

目次

1 はじめに	1
1.1.企画展概要	1
1.2.経緯	1
1.3.大学との連携	2
2 都市とくらし	2
2.1.市街地の拡大とモータリゼーションの進展	2
2.2.ライフスタイルの変化	4
2.3.名古屋の市街地の特徴	7
3 名古屋の魅力	9
3.1.名古屋市の魅力	9
3.2.地域の魅力	11
4 これからのすまい	13
4.1.近年の人口変化	13
4.2.都市に住む	16
4.3.研究者の視点	18
4.4.都市型居住の提案	19
4.5.広小路のRedesign	20
4.6.デジタル地図	20
4.7.来場者アンケート	21
5 都市居住シンポジウム	22
6 おわりに	22
6.1.成果	22
6.2.課題	23
資料	25

1. はじめに

1.1. 企画展概要

企画展の概要は以下のとおりである。(資料1 参照)

- ① 名称 都市に住む～次世代に引き継ぐ魅力ある都市～
- ② 期間 平成20年11月26日(水)～12月27日(土)
- ③ 場所 (財)名古屋都市センター11階まちづくり広場 企画展示スペース
- ④ 主催 (財)名古屋都市センター
- ⑤ 協力 大学建築系研究室(※1)、名古屋建築会議(※2)、都市環境デザイン会議
- ⑥ 来場者数 3850人/28日間(1日平均137.7人)
- ⑦ 関連講演会

1) 社会資本シンポジウム

日時 12月2日(火)13:30～16:30

場所 名古屋都市センター11階大研修室

主催 成熟社会における社会資本整備のあり方研究会、(財)名古屋都市センター

テーマ いま、どんな社会資本整備が必要なのか

ー交通の施設整備とサービス提供を中心にー

参加者数 約50人

2) 都市居住シンポジウム

日時 12月7日(日)13:00～16:30

場所 名古屋都市センター11階大研修室

主催 (社)日本建築学会東海支部都市計画委員会、(財)名古屋都市センター

テーマ 都心に住むー変わりゆく都心居住の課題と展望ー

参加者数 約60人

1.2. 経緯

平成18年度に策定した名古屋都市センター中期事業計画で研究成果を市民にわかりやすく伝えるための企画展を計画した。平成20年度からメインテーマを「持続可能なNAGOYAへの変革～次世代に引き継ぐ魅力ある都市～」としたこと及び成熟社会における都市の課題や方向についての調査研究が取り組まれてきた経緯を踏まえ、これまで基盤整備を進めてきた都市のストックをうまく使いこなすことが重要であるとの視点から「都市に住む」というテーマ設定をした。

展示については来場者の方々により興味をもってもらうために、模型など都市空間の提案を入れ、今後の議論の題材にしてもらうことを考えた。そして、大学研究者に相談したところ広小路の提案模型制作に取り組んでいた名古屋建築会議のメンバーの協力をえることになった。議論の中では、月に1回程度の勉強会を行い、模型作製につなげていくことも考えたが、時間的制約から継続的な勉強会は実現できなかった。

9月9日の名古屋建築会議ミーティングで名古屋都市センターから現状認識、課題などの説明と大学側で取り組んでもらいたい事項(街区内の建て替えにより段階的に都市が変化して最終的にめざすべき姿になるという提案を求めた)について提案し、議論した結果、模型の新規作成については時間的な限界があり、既存の設計製図の課題の再整理も含めて取り組んでもらうことになった。

1.3. 大学との連携

多くの大学が関わることから、関与する大学生同士のつながりが持てるような展開を考えることにし、並行して取り組んでいた広小路の提案模型について、都市センター大研修室で一同に会して作成するとともに、都市型住宅の提案について発表の場を設け、他大学の先生方が講評する講評会を行った。

○講評会

日時 12月5日(金)17:00～19:30

場所 名古屋都市センター11階大研修室

主催 関係大学教員

参加者数 約 60 人

また、取り組みの過程で大学側から今回は時間的制約が多いので、次年度以降も継続的に発展させていきたいとの提案があり、継続していくことになった。

2. 都市とくらし

2.1. 市街地の拡大とモータリゼーションの進展

名古屋市は大正時代から耕地整理手法を活用し基盤整備を積極的に推進してきた。戦後には土地地区画整理法が制定され昭和 30 年代に合併した市町村の区域（図 2-1）を中心に新市街地整備が進められた。表 2-1 は民間施行の土地地区画整理事業をまとめたものであるが、これ以外にも公共団体施行などの土地地区画整理事業などもあり、基盤整備事業が行われた区域は市域の 2 / 3 以上になる。（図 2-2, 表 2-1）

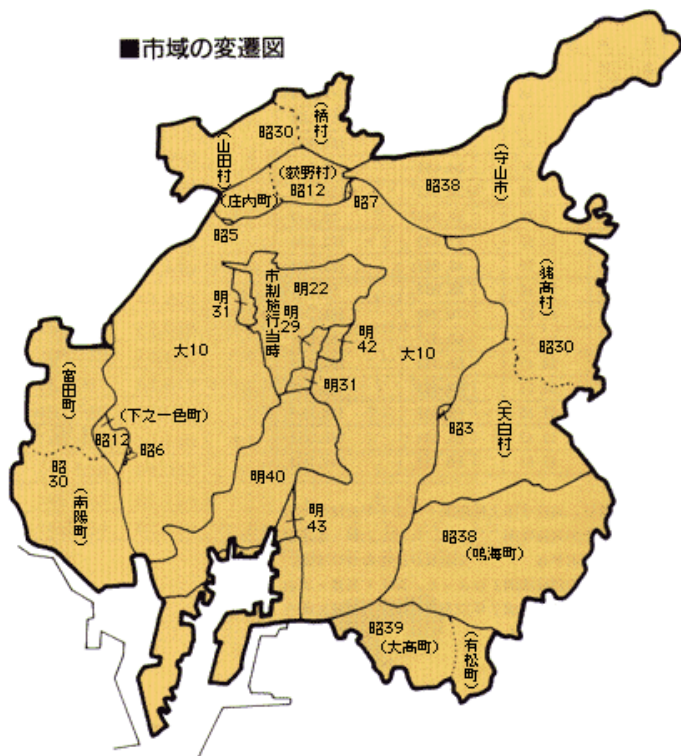


図 2-1 市域の変遷

(名古屋市ホームページ「市域・広域連携に関する調査研究報告書」より引用)

面積(km²)、人口(万人)

区画整理面積(km²)

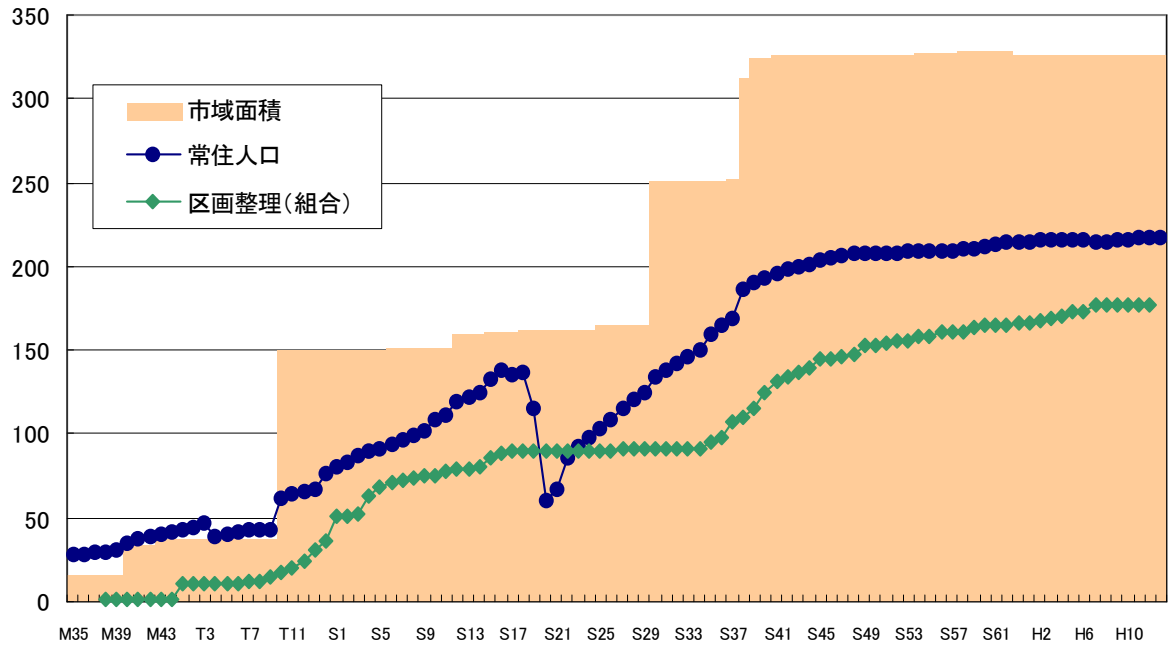


図 2-2 市域面積の拡大と常住人口

表 2-1 名古屋市の人口と市域面積

(単位: 人、面積 km²)

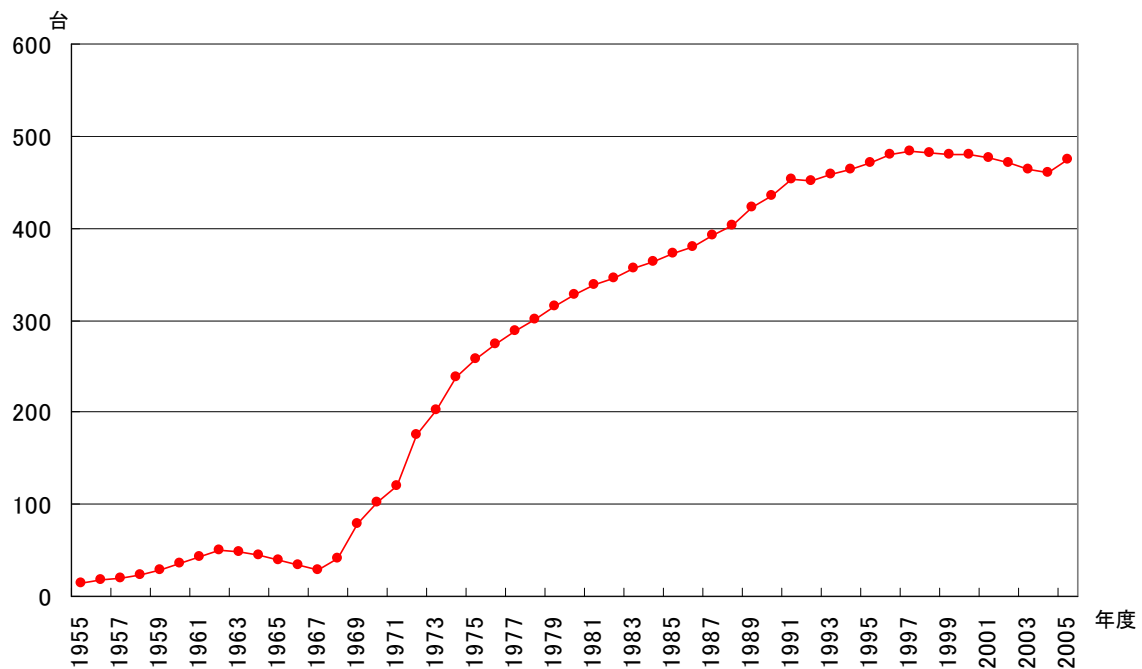
	常住人口	市域面積	区画整理 面積(組合)	区画整理面積 ／市域面積
明治38年	298,918	16.28	0.99	6.1%
明治43年	405,646	37.34	0.99	2.6%
大正4年	389,272	37.35	11.17	29.9%
大正9年	429,997	37.35	14.82	39.7%
大正14年	768,558	149.56	36.42	24.4%
昭和5年	467,031	150.74	67.90	45.0%
昭和10年	1,082,816	151.09	75.46	49.9%
昭和15年	1,328,084	161.09	85.69	53.2%
昭和20年	597,941	164.35	90.24	54.9%
昭和25年	1,030,635	164.35	90.24	54.9%
昭和30年	1,336,780	250.07	90.53	36.2%
昭和35年	1,591,935	250.81	95.39	38.0%
昭和40年	1,935,430	325.19	124.34	38.2%
昭和45年	2,036,053	325.66	144.23	44.3%
昭和50年	2,079,740	326.25	152.61	46.8%
昭和55年	2,087,902	327.56	158.35	48.3%
昭和60年	2,116,381	327.91	164.63	50.2%
平成2年	2,154,793	326.37	168.17	51.5%
平成7年	2,152,184	326.37	177.52	54.4%
平成12年	2,171,557	326.45	177.52	54.4%
平成17年	2,215,062	326.45	177.52	54.4%

注: 区画整理面積(組合)は、耕地整理・旧法・新法の土地区画整理(組合)施行の累計の値

1 組合は設立認可取消

出典: 名古屋都市センターまちづくりデータブック(国勢調査報告書、住宅都市局資料)

名古屋市の自動車保有率は図 2-3 のように 1970 年ごろから急激に増加し、1990 年代後半にはほぼ横ばいとなった。この時期は 1955 年以降に合併した新市街地の土地区画整理事業による整備が進められた時期でもある。



資料：名古屋市統計年鑑

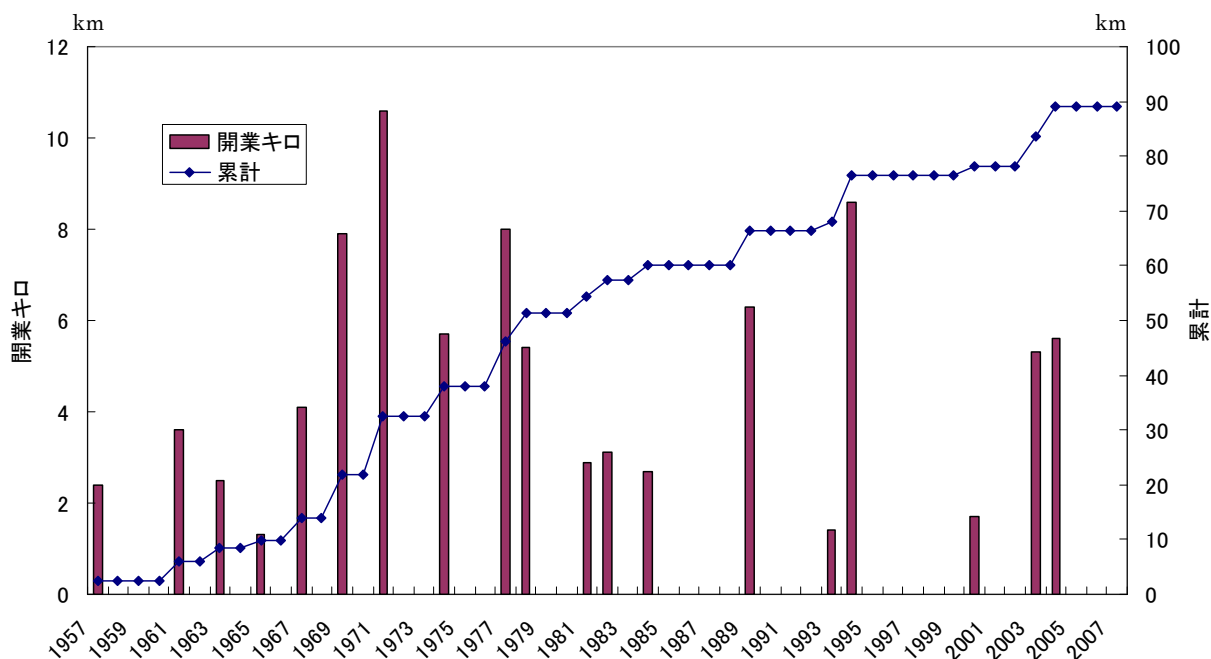
図 2-3 人口 1000 人当たりの自家用車台数

2.2. ライフスタイルの変化

新市街地の整備の進展とモータリゼーションの進展が重なり、さらに地下鉄の整備も図 2-4 のように進み、新市街地に新たな住宅地が広がっていった。また、この時期にスーパーマーケットが普及、定着し、郊外部では自動車ですーパーに買物に行くというライフスタイルが確立していった。

名古屋におけるスーパーマーケットの歴史を見ると、1960 年代からセルフ方式のスーパーマーケットが登場し、1960 年後半に、名鉄パレ、松坂屋ストア、ユニーなどの会社が設立されている。店舗の開店時期は 1960 年代後半から 1970 年代前半は既成市街地の住宅地でのスーパー開設が中心であった。1970 年に藤が丘まで地下鉄が伸び、松坂屋ストアが開店したあたりから新市街地のスーパーマーケット立地が増加している。モータリゼーションの進展、冷蔵庫の大型化などとともに自動車での買い物に行くスタイルが増加していった。

自動車での買い物に行くスタイルは次にホームセンターやスポーツ用品店などの郊外立地を促進し、1970 年代後半から新市街地にホームセンターが数多く立地するようになった。また、同時期に郊外型のスポーツ用品店も立地を始めている。さらに、1990 年代に入ると大型紳士服店や工場跡地を利用した複合型のショッピングセンターなどが立地を始め、大規模駐車場を備えた大型ショッピングセンターの立地が増加する。1990 年代は自家用車の増加が横ばいになり、定着した時期と理解できる。



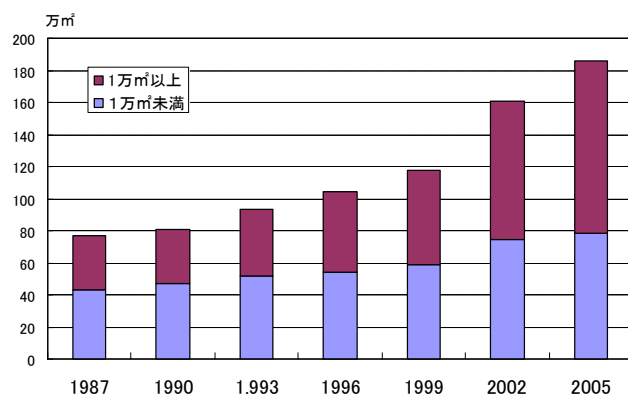
資料：名古屋市交通局事業概要

図 2-4 名古屋市地下鉄の延長

都市型の生活が浸透し、生活が豊かになると、生活時間が遅くなり夜間も営業するコンビニエンスストアが普及し始める。日本での第1号は1970年代前半であるが、名古屋市に出店されるのは1980年代以降盛んになる。都心部や駅の近くでは駐車場のないものも多いが、新市街地では広い駐車場を持ち自動車の利用も多い。消費者の多様なニーズに対応するように、24時間営業、弁当などの新たな商品開発などにより地域に定着していった。

さらに、1990年代後半になると携帯電話の普及と同時にWindows95の出現によりパソコンの家庭への普及が進んだ。また、ISDN、ADSL、光ファイバーとインターネットの通信速度の向上と利用料の下落によりインターネットが各家庭に普及した。図2-5のように2000年代前半には携帯電話の人口普及率が8割を超えた。

また、宅配便の取扱数も増加を続け、図2-6のように1990年代末以降、大幅に増加している。これは、メール便の増加やネットショッピングの増加なども原因していると考えられる。



資料：平成15年度「大規模商業施設設立地と生活環境のあり方に関する研究」のグラフを時点修正
データ：名古屋地域商業データブックより
注：店舗面積1000㎡以上のもの

名古屋市の大規模店舗の店舗面積の推移

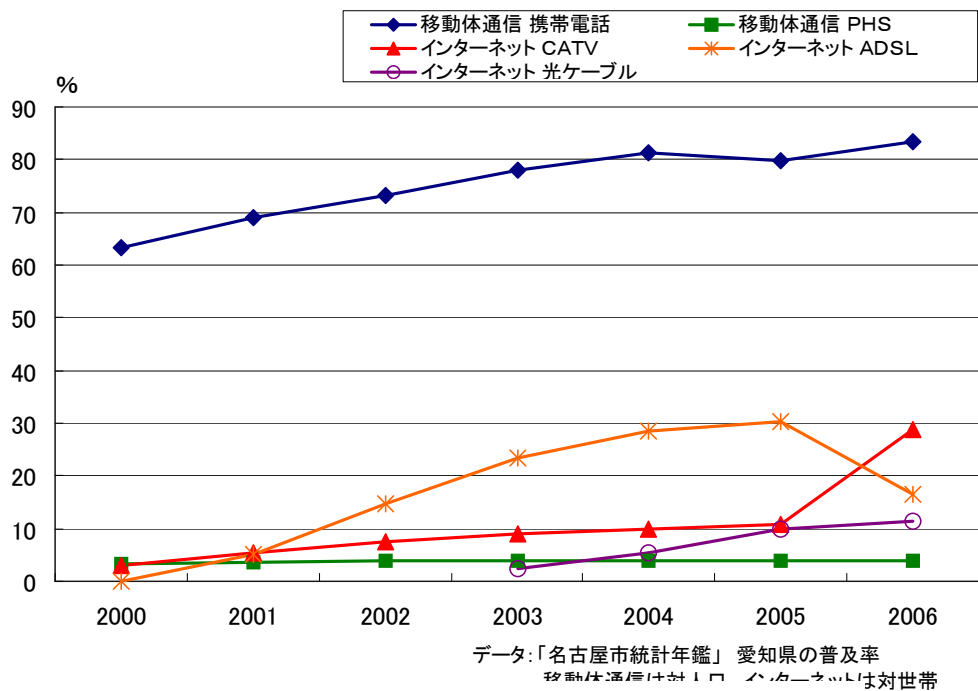


図 2-5 移動体通信とインターネットの普及

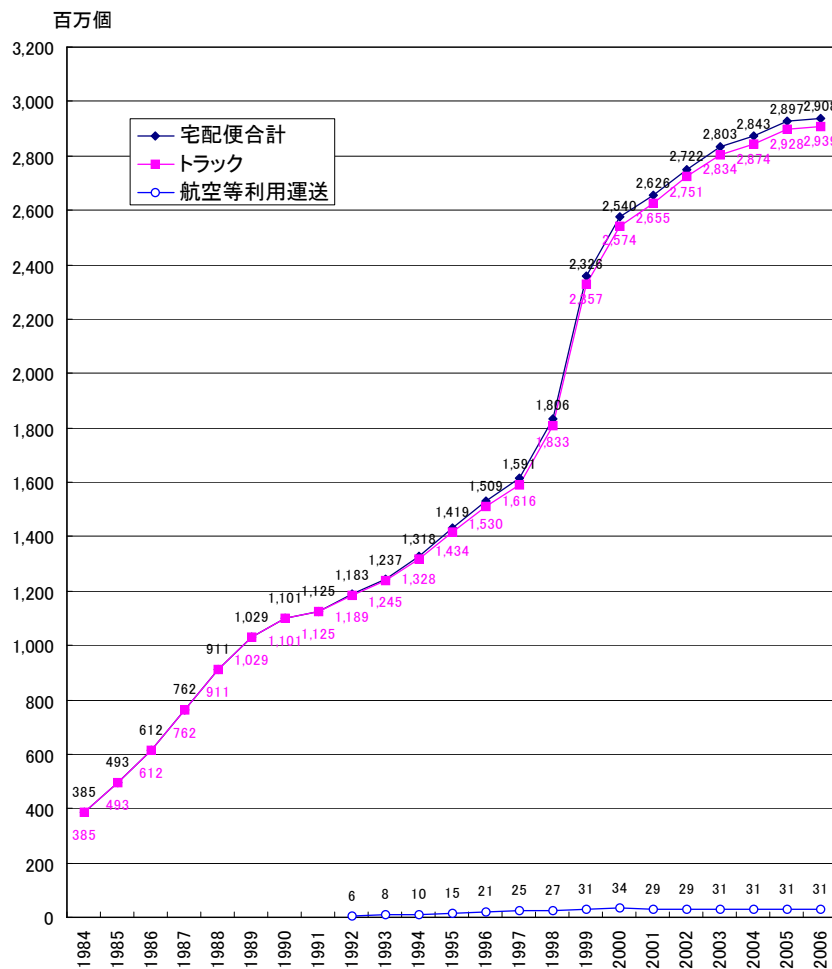
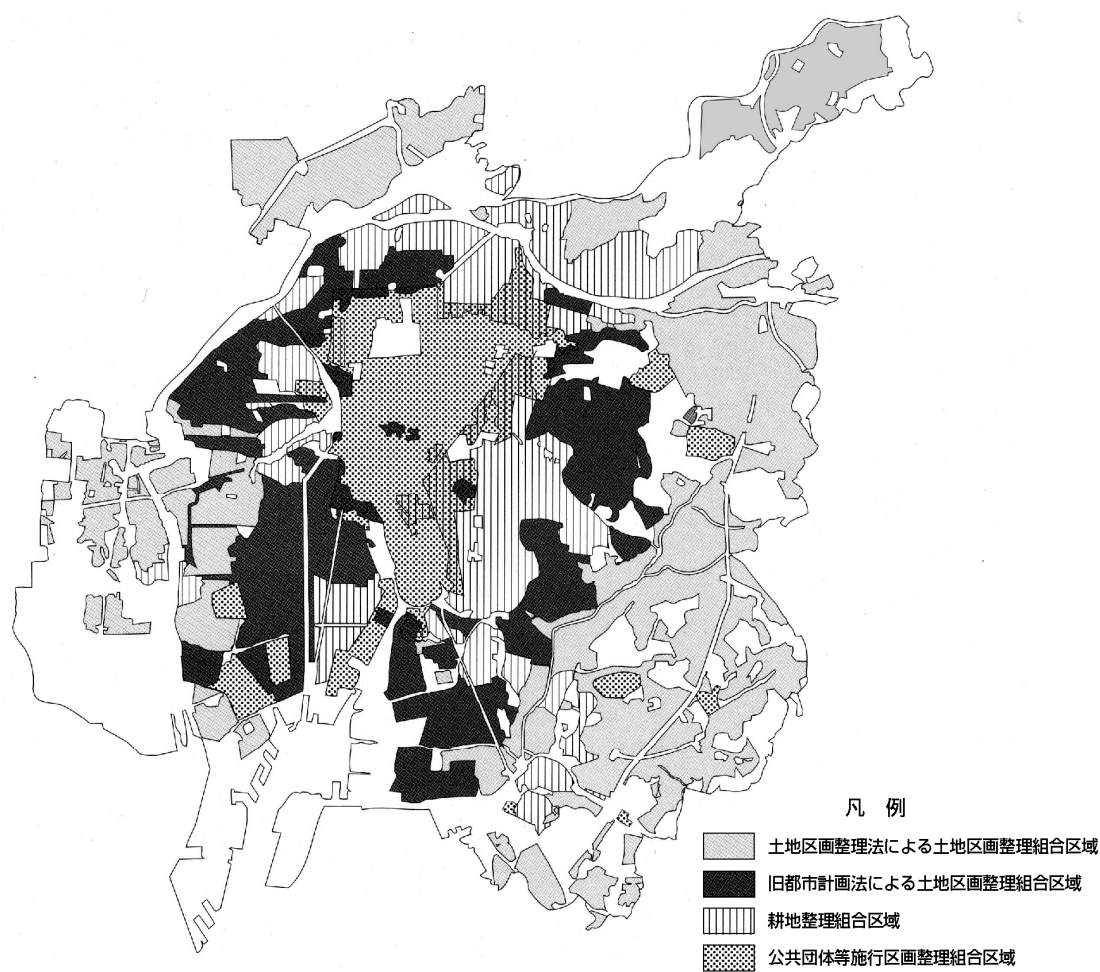


図 2-6 宅配便取扱個数の推移

2.3. 名古屋の市街地の特徴

名古屋市の市街地の第一の特徴は基盤整備が進んでいること。市域の2／3が土地区画整理事業などにより整備され、道路や公園などの都市基盤が整っている。しかし、整備の時期により大きく3つのエリアに分けることができる。第一は都心部で第二次世界大戦により焼失した部分を中心に戦災復興土地区画整理が行われ、江戸時代からの基盤割の骨格を活かした道路整備が行われた。戦災復興土地区画整理事業は面積3,450haで市域の約1割を占める。第二は既成市街地で、戦前から耕地整理事業や区画整理事業が行われ、一定の基盤整備済であるが、公園などの配置は十分ではなく、公園の少ない地域も残っている。第三は新市街地で、昭和30年代に合併した地域で土地区画整理事業が盛んに行われたところである。基盤整備済のところは公園なども適正配置されている。開発前に第一種低層住宅専用地域に指定され、開発をコントロールしてきたため低層住宅地を中心とする地域になっている。



出典：都市計画概要 2003,名古屋市

図 2-8 土地区画整理等による市街地整備

第二の特徴は大都市でありながら密度が高くないところである。市域の92%が市街化区域に指定されており、市街地は広範囲に広がっている。国勢調査で昭和35年から公表している人口集中地区(DID)は2005年の調査では274k㎡になり、市域の84%がDIDに含まれる。DIDの人口密度を他の都市と比較すると、図2-9のように東京、大阪などの大都市より小さく、地方都

市と同等の人口密度になっている。これは、名古屋市の市街地はゆったりしているとも言える反面、市街地が水平方向に広がり都市としてのまとまりに乏しいということもできる。

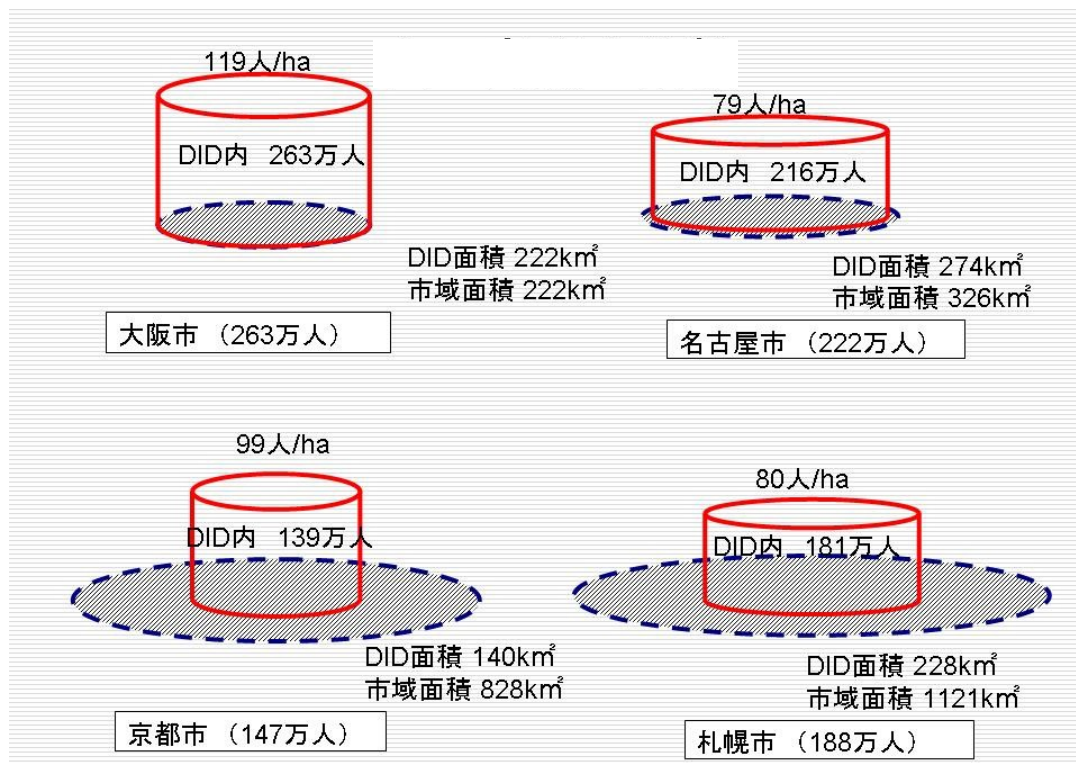


図 2-9 DID人口密度の比較

新市街地において土地区画整理事業を中心とする基盤整備を進めてきた結果、これまでの人口増に対応する市街地整備が実現したが、新市街地では自動車の利用を前提とした生活スタイルが中心となっている。これは図 2-10 の第4回中京圏パーソントリップ調査の結果を見てもはっきり現れている。

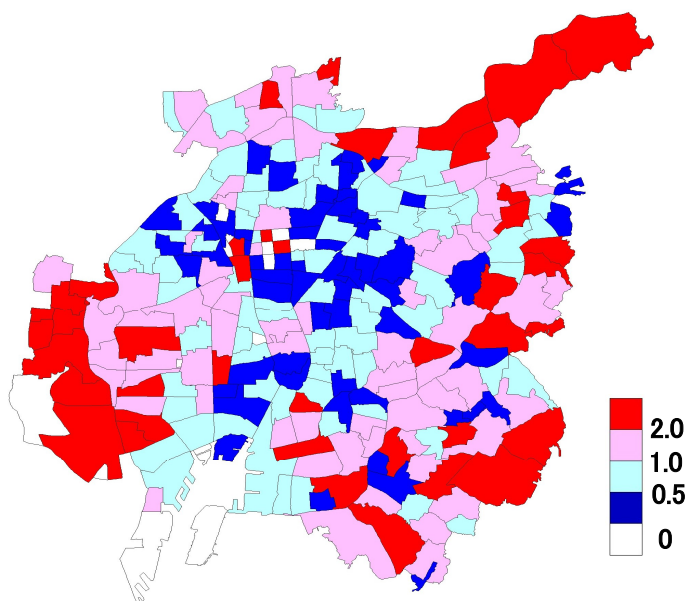


図 2-10 トリップ数の比率(自動車/徒歩)

(名古屋市内居住者、家事・買物・通院、居住地内々+流出トリップ)

平成 18 年度に名古屋都市センターが実施したアンケート（市内居住者 3000 人を対象に実施）によると、日常の食料品について 9 割の人がスーパーマーケットで購入すると回答しており、スーパーマーケットが生活に欠かせない存在になっていることがわかる。また、その交通手段としては約 57%が徒歩・自転車であるが、自動車利用も約 28%あり、日常の買物でも自動車がよく利用されていることがわかる。

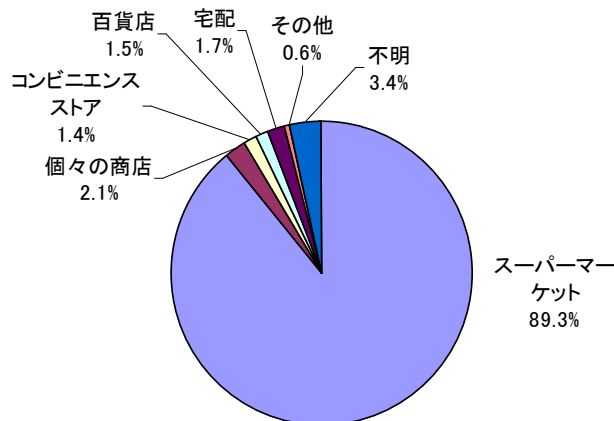


図 2-11 日常の食料品の買物先

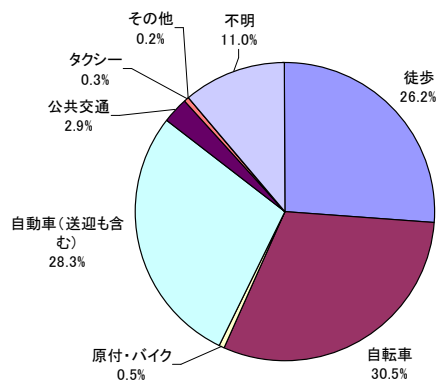
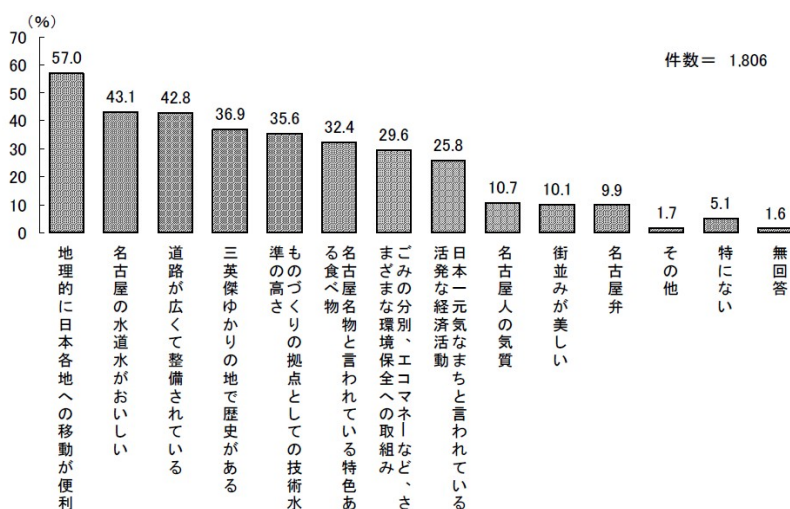


図 2-12 日常の買物(食料品)の交通手段

3. 名古屋の魅力

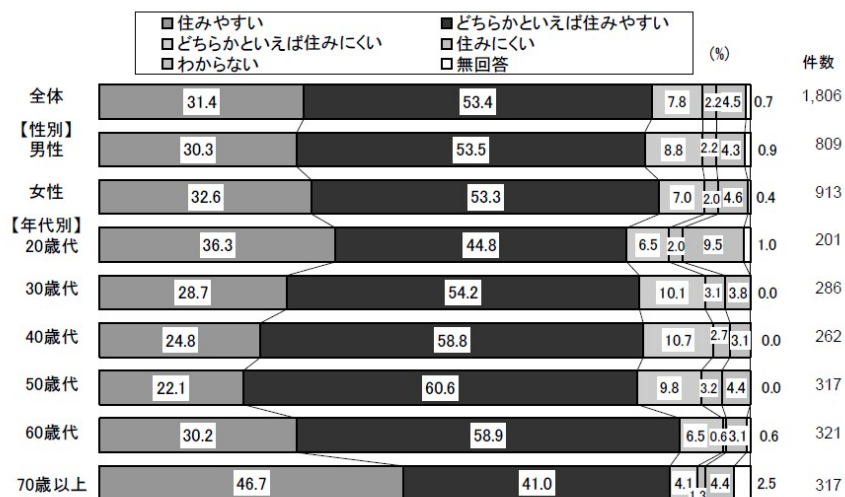
3.1. 名古屋市の魅力

名古屋市という都市の魅力は何か。平成 16 年の名古屋市「市政世論調査」では名古屋が誇れるもの、よいところとして図 3-1 のように、「物理的に日本各地への移動が便利」(57.0%)、「水道水がおいしい」(43.1%)、「道路が広くて整備されている」(42.8%) などが上位を占めている。また、図 3-2 のように名古屋が住みやすいと考える人は住みやすい(31.4%)、どちらかといえば住みやすい(53.4%)を合わせて約 85%を占めている。



出典:「市政世論調査」名古屋市、平成 18 年度

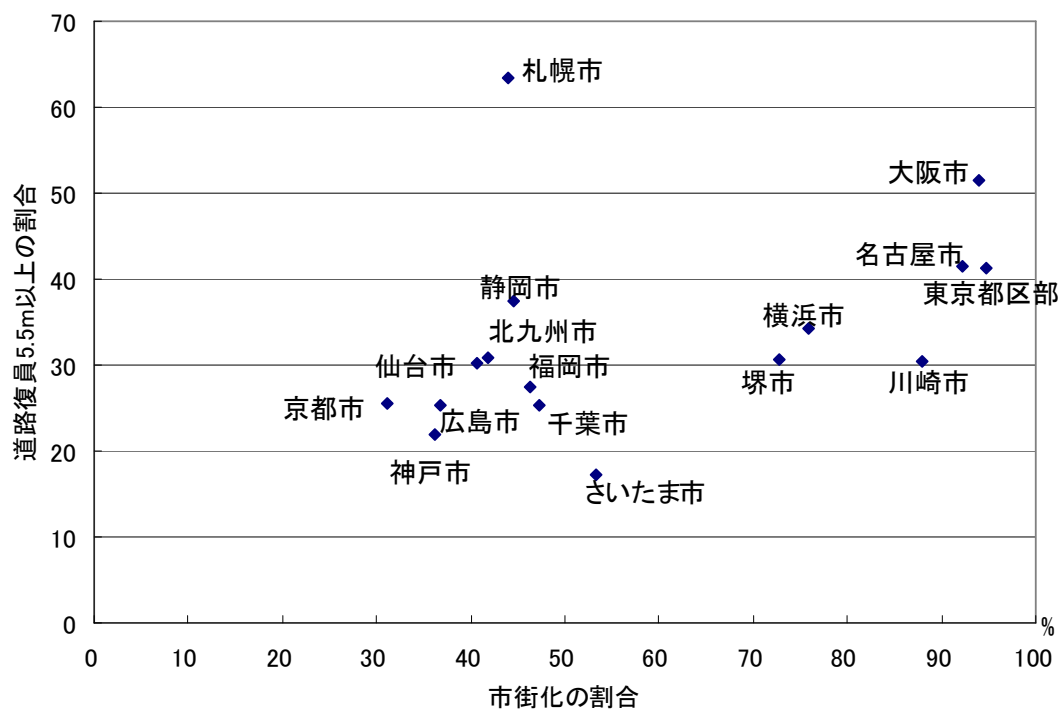
図 3-1 名古屋が誇れるもの、よいところ



出典:「市政世論調査」名古屋市、平成 18 年度

図 3-2 名古屋が住みやすいと考える人

第 1 位の名古屋の立地については、日本の中央に位置し、東海道新幹線、高速道路網やセントレアなどの交通網の整備により、東西経済圏や豊富な観光地へのアクセスもよくなっている。第 2 位の名古屋の水道水の水源は「名水百選」に選ばれた木曽川で、名古屋市上下水道局では独自の指標として名水の要件を定めている。また、第 3 位にあがった名古屋の道路は図 3-3 のように大阪市、東京都に並び、5.5m 以上の復員の道路の割合が高くなっている。同じく都市の基盤として重要な公園についても都市公園が整備され、図 3-4 に示すように公園から 250m の範囲（図の薄緑色の部分と緑の公園部分の合計）は、名古屋市域の 72%をカバーしている。



データ：大都市比較統計年表、平成 18 年

図 3-3 復員 5.5m 以上の道路の割合

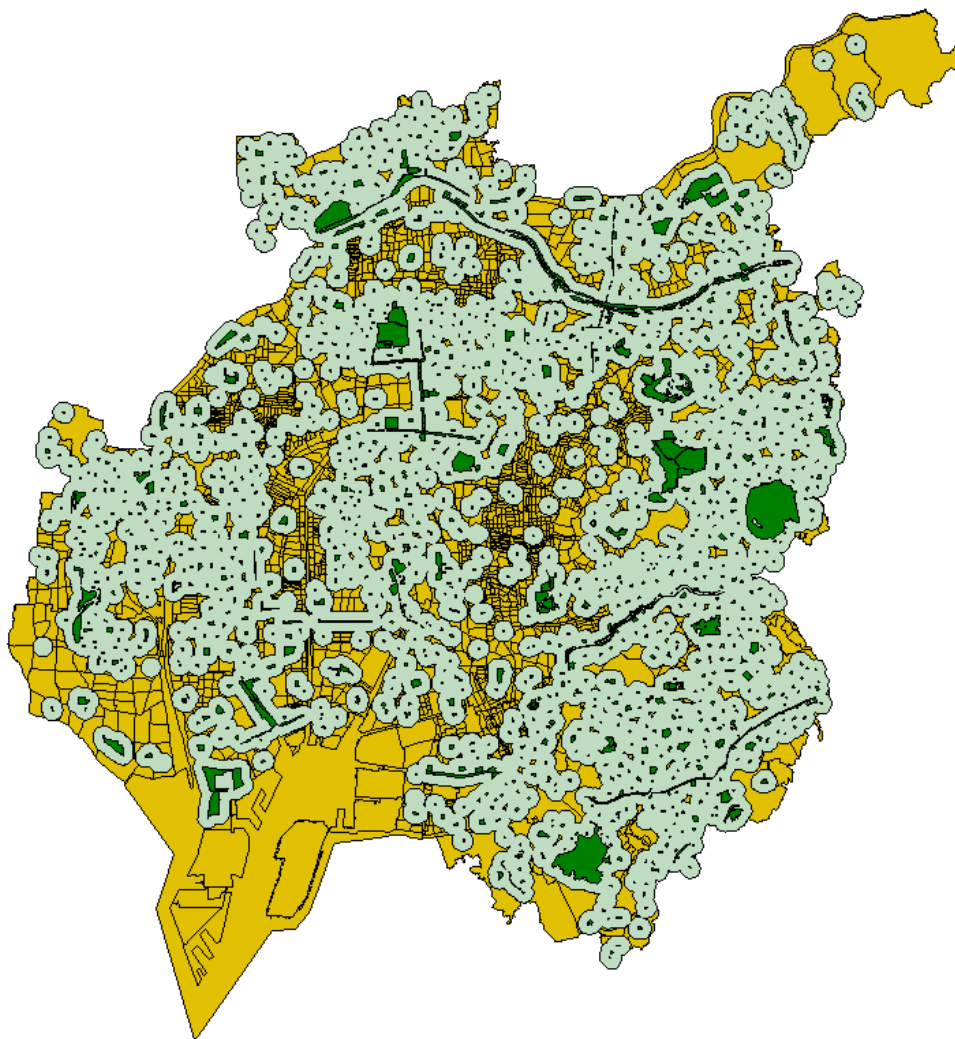


図 3-4 市内の都市公園と 250m 圏

3.2. 地域の魅力

(財)名古屋都市センターでは 1999 年度から市民研究員制度を設け、市民の方々に名古屋のまちについて研究をしてもらっている。2005 年度から 2007 年度の 3 か年については「私たちの住む街なかの『魅力資産』の再発見とユニーク活用アイデア」というテーマについて 4 人でグループを作り計 8 グループが 2 つの区を対象に調査研究を進めた。何に着目するかは各グループの個性が出るところであるが、それぞれが現地を歩き、魅力資産を再発見するとともに活用について提案を行っている。

グループによって、地域の魅力資産を捉える切り口は異なるものの、現地調査を基本に様々な魅力資産を発見し、その活用について提言が行われている。表 3-1 は 3 か年の調査結果を一覧にまとめたものである。地域それぞれの歴史の中で、様々な魅力が発見されているが、限られた期間で 2 つの区のすべてを拾い出すことは不可能である。地域に住む住民が自らの地域の魅力資産を掘り起こしていくことが大切である。

表 3-1 市民研究(H17～19 年度)一覧

テーマ： 私たちの住む街なかの「魅力資産」の再発見とユニーク活用アイデア			
年度	対象区	魅力資産	活用アイデア
17	千種区・名東区	①城山・覚王山界隈 ②香流川流域 ③高針地区 ④街道・公園・緑地	①現代版千種名東名所図会 ②城山覚王山 夜街散策・提灯散歩 ③香流川まちづくりコミュニティ活動 ④高針地区 旧地名プレートの設置など ⑤街道・公園・緑地 動物愛護・自然環境学習生活公園等
	北区・西区	①庄内用水流域 ②御用水・黒川 ③美濃路 ④稲置街道 ⑤岩倉街道	①庄内用水年間通水実現への取組み ②庄内用水散策路の整備 ③ボランティアガイドの育成と配備 ④地域住民を中心にしたまちづくり ⑤各街道筋の観光化 など
	瑞穂区・熱田区	①歴史の残る台地と坂道 ②街の小さなみんなの神社 ③街路のみどりと道標今昔 ④街の小さな「ほっと空間」 ⑤昭和の界隈 ⑥街中の癒し空間	①今どき路地、お絵かき広場、街かどサロン ②空地・空店舗活用による「昭和の魅力まちづくり」作戦 ③身近な親水空間の活用 ④ストリートファニチャーの計画的整備
18	東区・守山区	①神社、寺院、教会 ②古墳、遺跡、城址 ③町並み・近代建築物 ④街道・坂道 ⑤天王祭、茶道文化 ⑥ため池、河川 ⑦近年整備された魅力資産	①都心のオアシス探訪 ②伝統校のルーツ探訪 ③ため池を活用した市民ネットワーク ④古墳を活用した市民公園 ⑤道標・地蔵オリエンテーリング
	昭和区・天白区	①飯田街道の歴史・文化 ②空地利用 ③街の文化財・商標 ④天白にんじん	①飯田街道マップの製作、大学の活用、寺社の開放等 ②コミュニティガーデン候補地を探そう ③天白にんじんの地域ブランド化
	中川区・港区	①交通機関 ②河川・運河 ③みどり・はな、公園 ④神社・仏閣 ⑤バリアフリー、まちなみ、人的資産 ⑥藤前干潟、金城ふ頭	①あおなみ線を活用しよう ②荒子川を活かそう ③みどりを増やそう ④バリアフリーのまちづくりをしよう ⑤あおなみ線沿いのまちなみを構築しよう ⑥人的資産を活かそう など
19	中村区・中区	①アンケートによる魅力資産 ②名古屋都市景観賞 ③地下街、繊維問屋街 ④文化・演劇活動、名古屋市美術館 ⑤名古屋城	①都市センターを景観整備機構に ②近代化遺産を魅力資産として活用 ③不動産証券化事業やPFI、PPPの研究
	南区・緑区	①水環境 ②緑地空間 ③路地空間 ④都市開発の昔と今	①河川、ため池の親水性 ②緑資源の保全、扇川の船着場跡の復元等 ③路地の活用 ④青峰観音と船着場跡の小公園化、学区単位の地域基本構想づくり など

4. これからのすまい

名古屋市は 2004 年にまちと交通のあるべき姿を実現するため「なごや交通戦略」をまとめた。その中で「環境にやさしい交通」、「まちの賑わいを支える交通」、「安全・快適な交通」という 3 つの交通に関する目標を掲げ、以下の戦略の 4 本柱と重点を定めた。

- ①自動車の流入や違法駐車抑制の抑制～重点：都心の自動車減量～
- ②公共交通の使いやすいまちづくり～重点：駅そばルネサンス～
- ③使いたくなる公共交通の実現～重点：エコ・ポイントTDMとちょい乗りシステム～
- ④環境にやさしいライフスタイルの普及～重点：交通エコライフ～

また、CO₂の削減という観点からも、これまでのライフスタイルを見直し、今後、どのようなまちで、どのようなくらしを実現していくか考えていかなければならない時期であるとの認識が必要である。生活の基本となる「すまい」について考えることとする。

4.1. 近年の人口変化

図 4-1 の名古屋市の出生数、死亡数の変化を見ると、昭和 40 年以降一貫して出生数が死亡数を上回り自然増となっているが、出生数の減少と死亡数の増加により、その差は縮まってきている。また、図 4-2 のように昭和 41 年から平成 13 年まで転出超過だったが平成 14 年以降は転入超過になり、名古屋市の人口増を支えている。

さらに図 4-3 で区別に転入者の年代を比較すると、中区、中村区は 15 歳未満児率が低く、熱田区、東区、北区は転入者の平均年齢が高い。また、緑区、名東区などは 15 歳未満児率が高く、ファミリー層の割合が相対的に高いことが推測される。

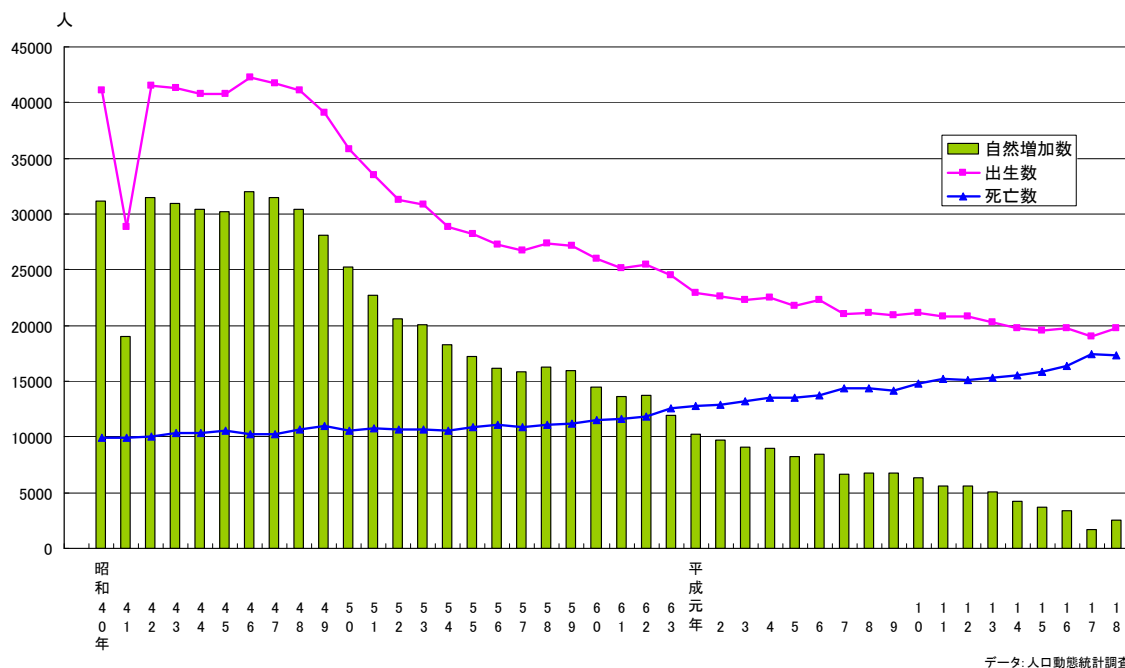


図 4-1 出生数・死亡数の変化

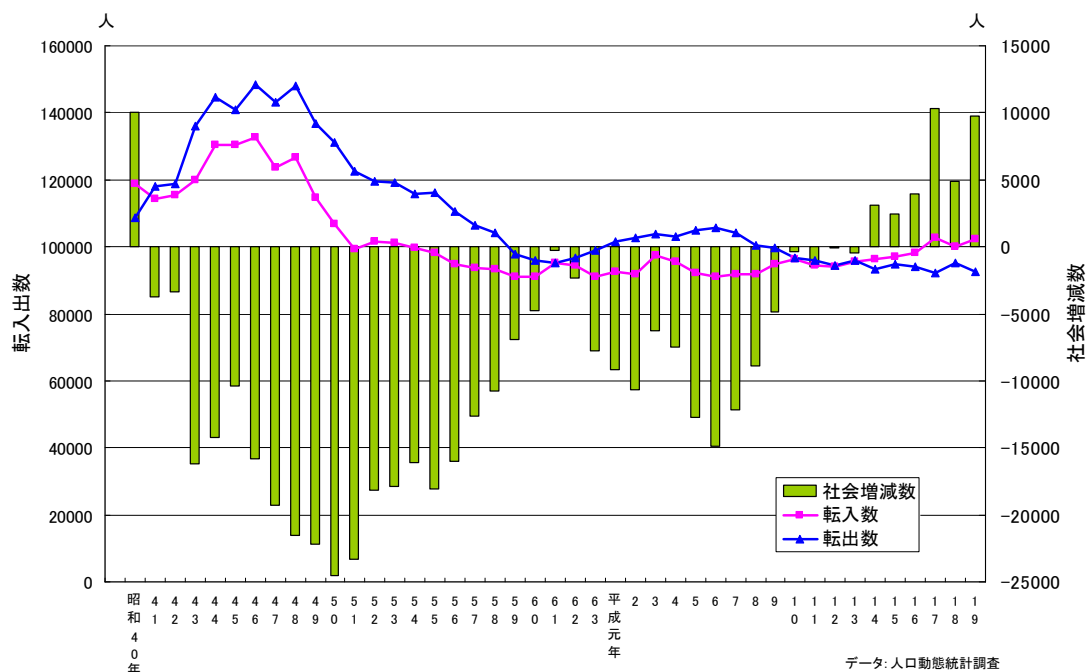


図 4-2 転入出数の変化

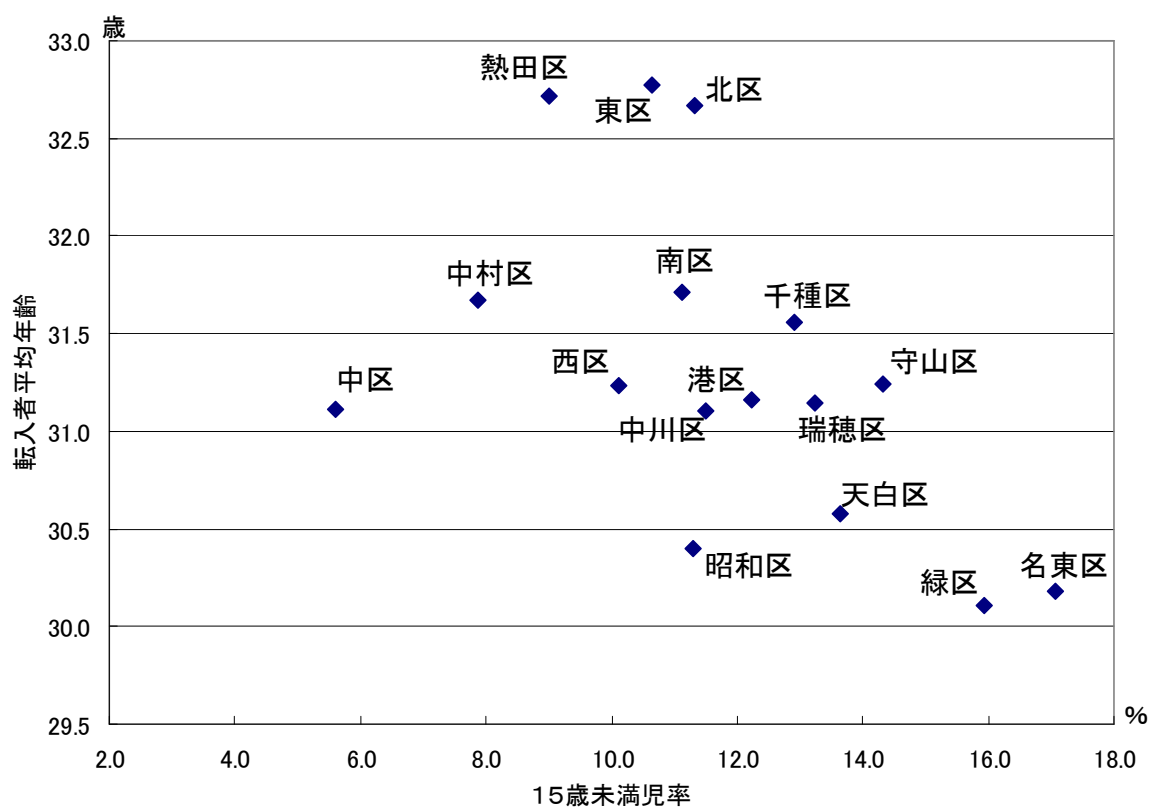


図 区別転入者の平均年齢と15歳未満児率

これら人口の変化を学区別データでみると図 4-4、図 4-5 のように人口密度は都心部周辺の既成市街域が高いが、このエリアは人口が減少しているエリアでもあることがわかる。

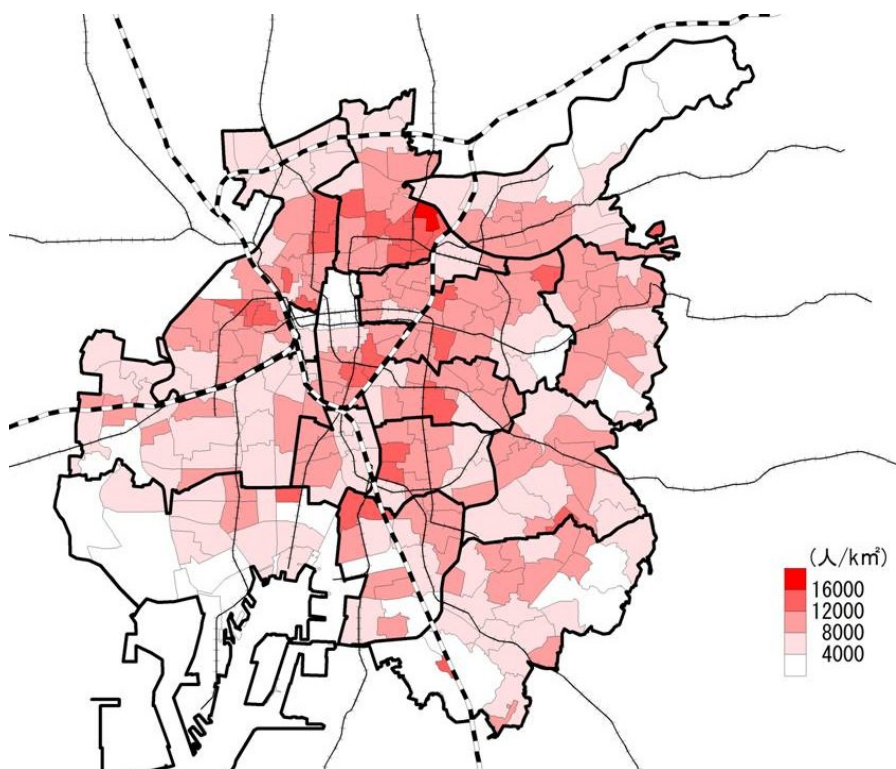


图 4-4 学区别人口密度(H17 年)

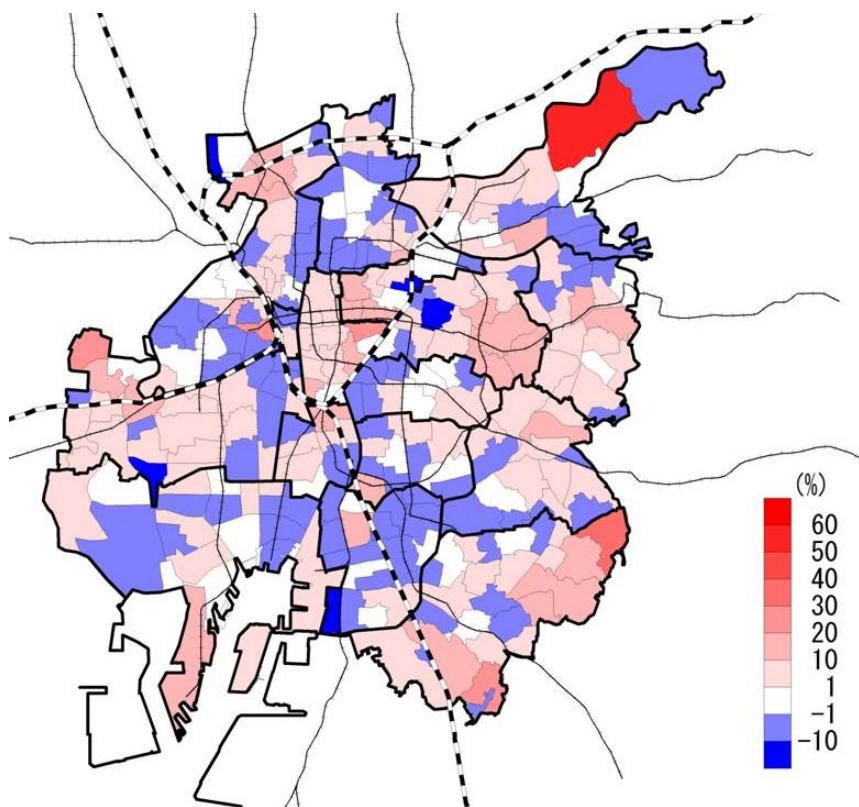


图 4-5 学区别人口增加率(H12~17 年)

4.2. 都市に住む

「都市に住む」という視点で考える際に、市街地形成の歴史的違いから都心域、既成市街域、新市街域の3つのゾーンに分けて考える。

第1の都心域では、(財)名古屋都市センターが実施した2001年度「都心居住推進のための調査研究」、2002年度「都心居住推進のための調査研究(その2)」などの調査研究がある。その中では名古屋新世紀計画2010における概ね「都心域」に相当するJR東海道本線及び中央本線と外堀町線に囲まれる範囲を対象に現況調査や都心居住者に対するアンケート調査などを行っている。

このアンケートは都心部で平成8年から13年のマンション取得者1670戸を対象に平成14年に行ったもので、回収率12.2%であった。その中から都心部マンション居住者の考え方をみると、居住者としては図4-6のように単身者の割合が高く、40歳代、50歳代でも半数近くが単身者となっている。

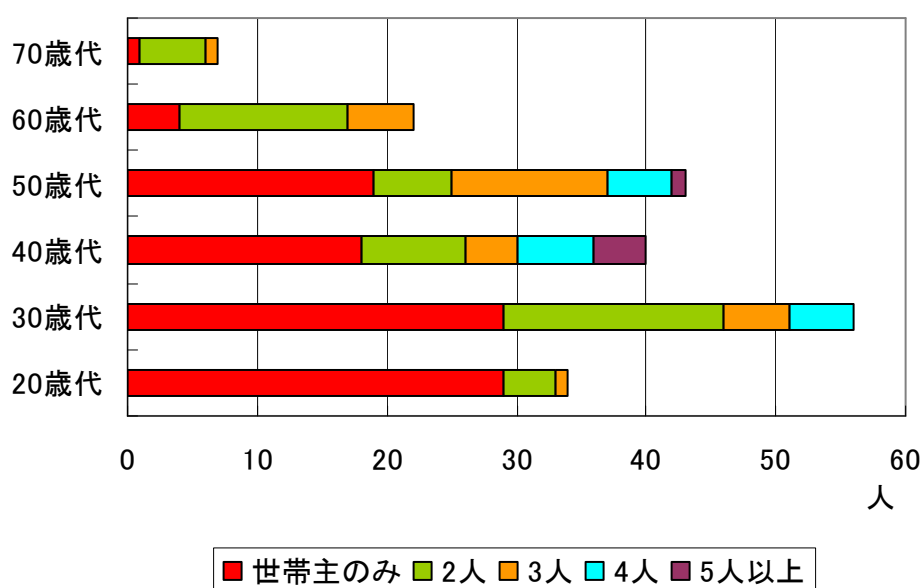


図 4-6 年代別居住者数

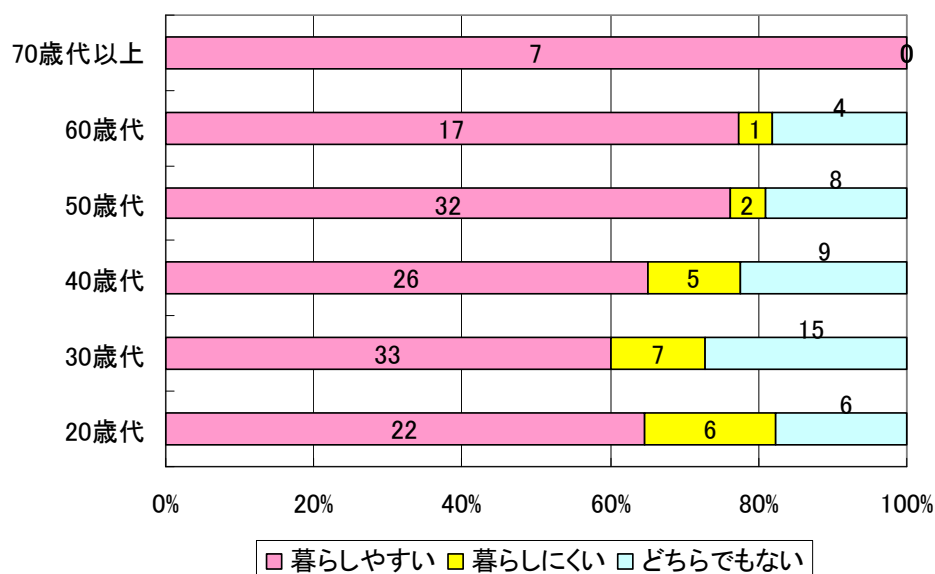


図 4-7 都心の印象(年代別・%)

図 4-7 は都心の印象について暮らしやすいと回答している人が、最も低い 30 歳代でも 6 割、次に 20 歳代、40 歳代と続き、年齢が高くなるほど暮らしやすいという回答の割合が高くなっている。

暮らしやすさの理由としては、図 4-8 に示すように通勤の利便性や交通機関の充実、文化・芸術・娯楽などの充実、買い物の利便性が上位を占めている。逆に、暮らしにくい理由としては図 4-9 に示すように、緑が少ない、買い物が不便、交通騒音・大気汚染、生活費が高いなどが上位にあがっている。買い物について便利と不便の両方があがっている点については、地域によってスーパーマーケットなどの立地に差があるためと考えられる。

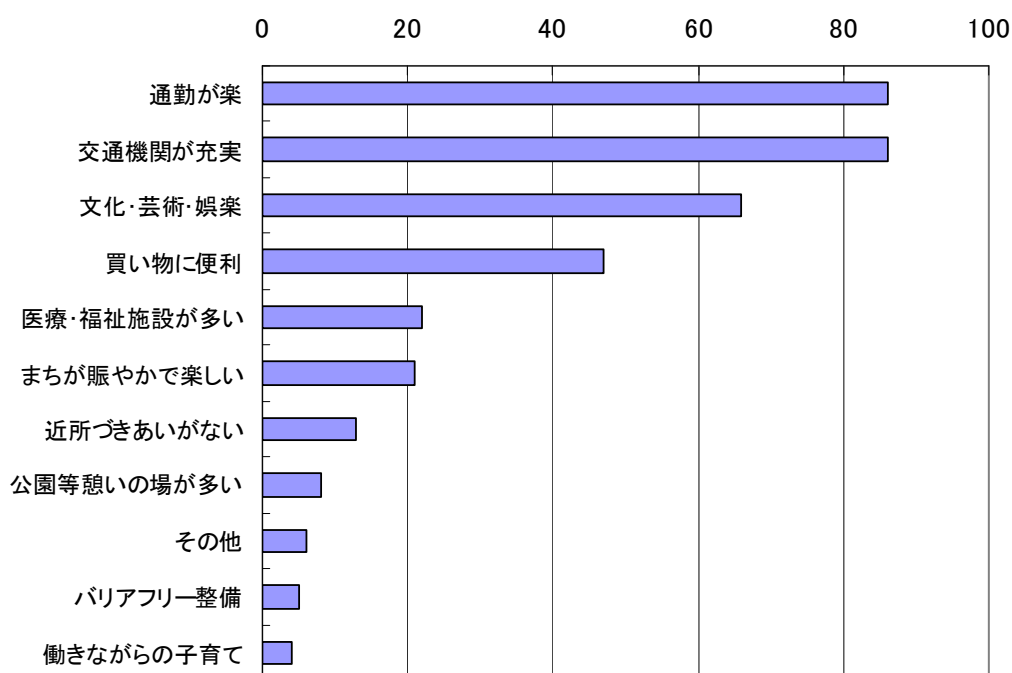


図 4-8 暮らしやすい理由

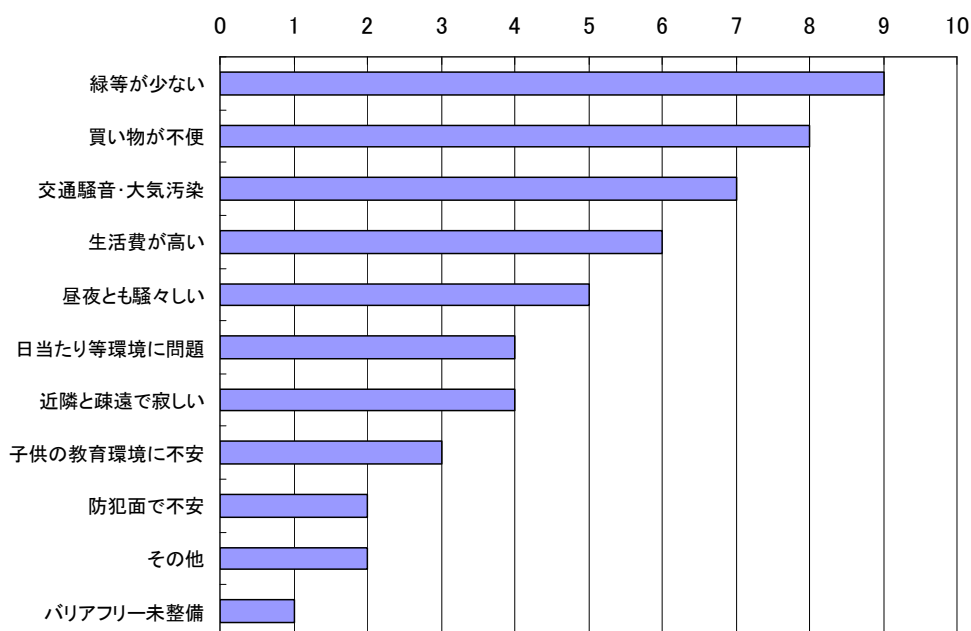


図 4-9 暮らしにくい理由

第2の既成市街域では、人口密度が高い市街地が形成されているものの近年は人口が減少している地域である。高齢化率も高く、低層住宅と高層マンションの混在などによる課題も見られる。子どもが少なくなり、図4-10のように中村区、西区、北区などでは小学校の1学年の学級数が3クラスに満たない学校が多い。これまで整備された都市の既存ストックを有効に活用できるよう人口減少に歯止めをかけ、利便性の高い都市型の生活を実現していくことが望ましい。

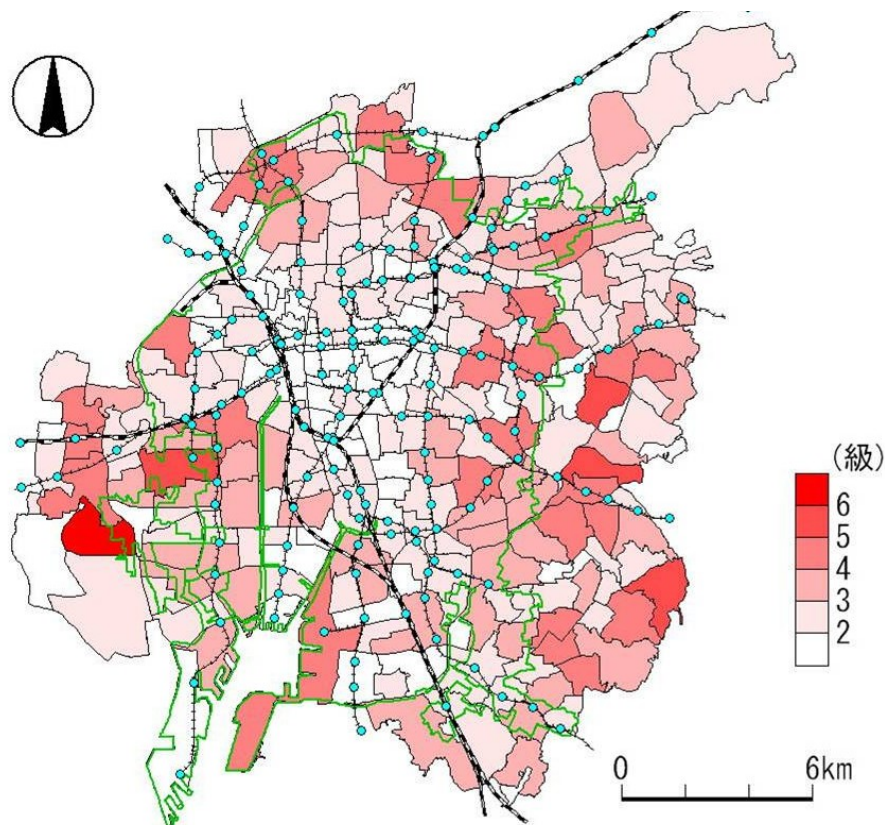


図4-10 小学校1学年当たりの平均学級数(平成20年度)

第3の新市街地では、モータリゼーションの進展とともに市街化されたため、生活スタイルが自動車利用を前提としたものになっている。鉄道駅近くには、多くの便利施設などが立地し、生活の核となっているところも多く、人口密度も高い。なごや交通戦略では駅そばルネサンスとして駅そばの人口密度を高め、歩いて暮らせるまちづくりを推進しようとしている。

4.3. 研究者の視点

都市居住について、名古屋都市圏の建築・設計系研究者に意見をまとめてもらった。各研究者の意見については、①住んでみたい都市と理由、②なぜ都市居住が重要か、③名古屋のどこで都市居住を進めるべきか、④どのような人々が都市居住を好むか、⑤集合住宅 vs. 戸建住宅、分譲住宅 vs. 賃貸住宅という都市居住に選択肢についてどう考えるか、⑥名古屋における5年後・10年後・30年後の都市居住の将来像と実現方法をどのように構想しているかの6つの質問に答える形でまとめた。(資料4参照)

4.4. 都市型居住の提案

今回の企画展に大学及び都市環境デザイン会議から都市型住宅の提案と模型の展示を行ってもらった。その一覧を表 4-1 に示す。

表 4-1 学生提案

大学等	対象地区	提案	提案者
名古屋大学	中区錦二丁目	錦二丁目の現況模型と環境カルテ	石橋洋二郎、陳愉、澤根慶子、瀬戸一哉、山下貴史
名古屋大学	中区錦二丁目	キープロジェクト	市川智章
名古屋大学	中区錦二丁目	STEEL RIBBON	加藤祐樹
名古屋大学	中区錦二丁目	重層都市	埴雄太
名古屋大学	中区錦二丁目	かざぐるま	北野拓哉
名古屋工業大学	中区錦二丁目	音棲む街角	佐藤彩子
名古屋工業大学	中区錦二丁目	路地のある集合住宅	杉浦文哉
名古屋工業大学	中区錦二丁目	だんだん村	竹川裕人
椙山女学園大学	中区錦一丁目	CushionITY	伊藤瑠美、高間英里、山田桃子
椙山女学園大学	中区松原	Mix!	大塚佳奈子、鬼頭香子、早川亜希
名古屋市立大学	千種区覚王山	短冊型 1面アプローチ	谷口竜
名古屋市立大学	千種区覚王山	短冊型 2面アプローチ	中西美友
名古屋市立大学	千種区覚王山	南面採光 板状配置型	鈴木麻央
名古屋市立大学	千種区覚王山	東西採光 分棟配置型	中村僚太
都市環境デザイン会議	中村区名古屋駅	“お値打ち” なごやの都心居住	石田 匠、河崎 泰了、集山一廣、松本 篤

当初、都心部の街区を取り上げ、段階的建て替えによる街区将来像の提案ができないかと相談した。その考え方については最初に述べたように時間的制約などもあり実現できなかったが、椙山女学園大学の中区松原の提案については、第1期（2010年）、第2期（2025年）、第3期（2040年）、第4期（2050年）の4段階で開発し、最終的に容積率350%の開発提案を行っている。



4.5. 広小路のRedesign

名古屋建築会議では11月末から「広小路のRedesign」と題して、栄交差点から伏見交差点までの南北8街区ずつについて再整備の提案を行った。8つの研究室がそれぞれ南北セットで提案模型を作成した。模型は一部の研究室を除いて名古屋都市センターの大研修室で11月25日から27日の3日間で組み立てられ、その製作は企画展に合わせ、一般公開した。

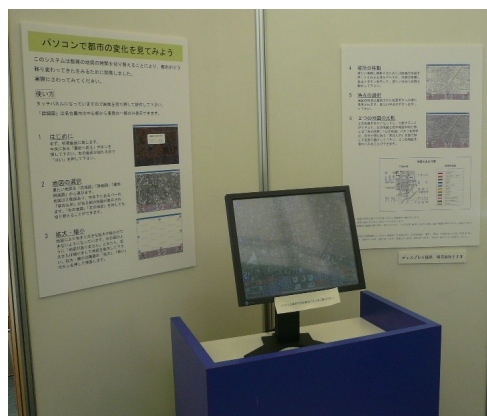


展示については、他会場を巡った後、12月12日から27日までは名古屋都市センターの企画展内で行った。そのため、企画展の展示レイアウトを前半と後半で変更し後半の展示に「広小路のRedesign」を組み込んだ展示とした。(資料2参照)

この模型は連続した街並みを作ることを目的とせず、それぞれの研究室が自由な発想で提案したもので、都心の魅力づくりという視点でユニークな提案であった。

4.6. デジタル地図

2007年度の名古屋都市センター自主研究でデジタル地図を使い都市の変遷を見るシステムの検討を行った。11階の常設展示での活用も考慮してタッチパネルで使えるシステムとしたものを今回の企画展で展示し、来場者の方々に見てもらった。次のアンケートでもわかるように7%の方がデジタル地図に興味を持つなど、実際にシステムを操作して興味をもってもらえるシステムとして活用できる見通しが立ったと言える。



パソコンで都市の変化を見てみよう

このシステムは数種の地図の時間を切り替えることにより、都市がどう移り変わってきたかを見るために開発しました。
実際にさわってみてください。

使い方
タッチパネルになっていますので画面を指で押して操作して下さい。
「詳細図」は名古屋市の中心部から東側の一部のみ表示できます。

- はじめに**
まず、初期画面に戻します。
中央にある「最初へ戻る」ボタンを押して下さい。右の画面が現れるので「はい」を押して下さい。
- 地図の選択**
見たい地図を「広域図」「詳細図」「建物用途図」から選びます。
地図は2画面あり、中央下にあるバーの「紫の丸印」がある側の地図が表示されます。「右の地図」「左の地図」を押しても切り替えることができます。
- 拡大・縮小**
地図により大きく小さな拡大縮小ができるようになってます。右の図のように「地図がありません」と出たら、拡大または縮小して地図を表示して下さい。拡大・縮小は画面の「拡大」「縮小」ボタンを押して検索します。

- 場所の移動**
見たい場所に移動するために画面の地図を押してそのまますぐに移動するか、地図の周囲にある点ボタンを押して、見たい方向に地図を動かして下さい。
- 時点の選択**
地図の時点は選択された地図ボタンの横に表示されます。見たい時点のボタンを押して下さい。
- 2つの地図の比較**
2つの地図を同時にセットし、比較することができます。左の地図と右の地図の切り替えは「左の地図」「右の地図」ボタンを押すか、中央下側にある「紫の丸印」を押して任意に動かして下さい。2つの地図を重ねてみることもできます。

地図の主な凡例

広域図	建物用途図
建物	住宅
商業	商業
工業	工業
公共施設	公共施設
交通	交通
緑地	緑地
水域	水域
その他	その他

(注1) 地図の時点は表示の年年度ではなく前後数年の幅があります。
(注2) 地図の重ね合わせは多少のズレがあります。
(注3) 詳細図の範囲は拡大図の一部のみですが、さらに縮小200年と400年以上1200年の範囲が異なるため一部表示されません。
広域図は国土院発行5万分の1地図「名古屋北図」「名古屋南図」「瀬戸」の明治22~24年、明治24年~大正9年、昭和5~13年、昭和20~31年、昭和45~46年、昭和57~58年、平成9~12年のものを使用しました。

4.7. 来場者アンケート

企画展の期間中（2008年11月26日～12月27日）、来場者アンケートを行い、182人の方から回答があった。回答者の年代は図4-6のように50代以上が過半数を占めるなど年代の高い方が多くなっている。また、一番気に入った展示については、大きく分けると「1. 都市とくらし」（23.8%）、「2. 名古屋の魅力」（17.5%）、「3. これからの住まい」（49.7%）、「広小路のRedesign」（9.1%）と「これからの住まい」の模型提案コーナーが多い。しかし、それぞれのパネルについてもほぼ均等になるなど来場者の方々に全体として興味を持ってもらえたと考えることができる。

また、自由意見欄にも多くの回答が寄せられた。「明治、昭和、平成と変わったまちを比較でき驚きました。未来のなごやの街がとても楽しみになれる展示でした。」、「人口減少、高齢化社会へのこれからの『まちづくり』について考えるべき事は多いということが認識できた。都市における『コンパクトシティ』、田舎における『シャッター通り』、『まちに住む』というのは簡単そうで難しいと思う。」、「データがまとまっていてよくわかった。」、「製作者のコメントがほしい。」、「名古屋の将来像をイメージしたものがあると面白い。」、「大学の研究室が競うのはおもしろいです。」、「もっと学校教育で地域（名古屋について）教え、学習すべき。」、「偶然この企画展を知りました。もっと広報活動があったらと思います。」など展示からまちづくりの意見につながっていることが読み取れるものも多く展示の趣旨が伝わったと理解できる反面、PR、説明のしかたなど課題も指摘していただいた。学生たちと一緒に考え、発信していくことについても期待する意見が多く今後の展開に生かしていけるとよい。

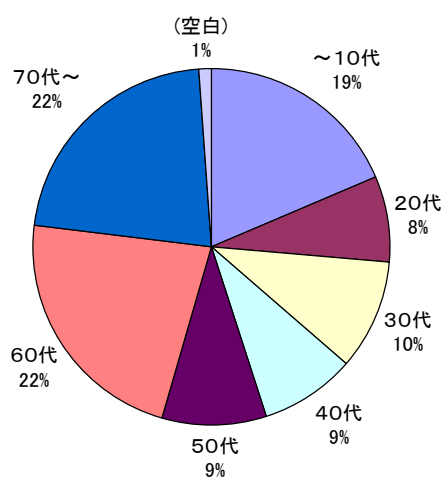


図4-6 回答者の年代

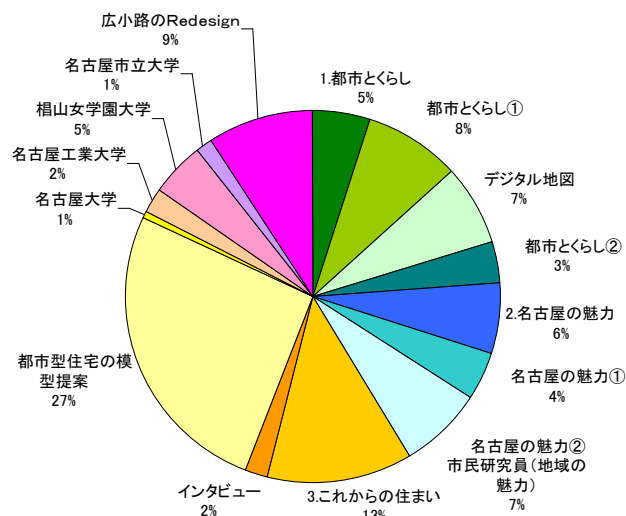


図4-7 一番気に入った展示(有効回答 143)

また、会場にメッセージボードを設置し、来場者に自由意見を書いてもらった。その意見には「市内に魅力ある隣町スポットがあり休日に出かけたい町」、「緑と共生できる公害の少ない町」、「遊ぶところがたくさんある町」、「川遊びができるまち」、「ホッとできる場所がほしい」、「交通アクセスのよい街」、「自転車も安全に走れる道」、「オシャレな街並み」、「学生が全国から集まるまち」、「障害者に優しい街」、「立ち止まりたい“場”がある街」など約40の意見が書き込まれた。

5. 都市居住シンポジウム

12月7日の都市居住シンポジウムは(社)日本建築学会東海支部都市計画委員会と共催で行った。特に中心部の居住に焦点をあて、「都心に住むー変わりゆく都心居住の課題と展望ー」というテーマとした。講演では、まず名古屋大学村山准教授から企画展に出展した作品から都市型住宅にどのような提案が行われたかを報告し、都市居住・都心居住を推進する都市のマスタープランの必要性、駅そば地区のマスタープランの必要性などが提案された。次に明海大学齊藤教授からはエリアマネジメントという視点で今までの住宅政策や住まい方のトレンドを変える必要があり、公と民の関係、まちと住まいの関係、開発と管理の関係などを変えていくことで魅力あるまちにしていくことの必要性が話された。また、金沢市の木谷氏は、金沢市の取り組みとして1970年頃から独自条例でまちづくりが行われ、まちなか区域では「まちなか定住促進条例」で都心居住政策を推進し、平成13年から18年で約14億円の補助金により377億円の経済波及効果があったこと、中心市街地活性化の政策として交通政策と居住の関連性を強化していることが報告された。

その後、報告者3人に加え名古屋市の後藤住宅企画課長を加えパネルディスカッションを開催した。都心居住の課題として地下鉄駅への再結集が考えられ駅そばを中心とした地区の計画が必要であること、都心居住の将来として都市全体を考え都市施設の立地を考える必要があり、地区居住環境の長期的担保性が地価に反映するようしくみが求められる、都心居住について名古屋型の戦略をつくる必要があるなどの議論がなされた。(資料5参照)



6. おわりに

本レポートは企画展「都市に住むー次世代に引き継ぐ魅力ある都市ー」で作成したパネルの内容を中心にまとめたものである。「都市に住む」という切り口は住宅のあり方だけでなく、環境やにぎわい、歴史など様々な要素の総体としてとらえられる。さらに、都市を郊外や農村部と比較して集積によるメリットをどのように享受できるかという視点も重要である。また、人口減少時代を迎え、環境首都をめざす名古屋市において市街地にメリハリをつけ、集約型の都市構造をめざすことはこれからの都市づくりの重要なテーマである。これらについて都市センターのこれまでの研究成果の一部を紹介しパネルにまとめたが、取組を通じて、将来の空間像を提案し来場者に考えていただくこと、大学、市民などの広範な交流の場をつくっていくことの大切さを再認識した。

6.1. 成果

今回、企画展を実施するにあたって、都市センターがこれまで取り組んできた調査研究成果をわかりやすく市民に展示し、これからの都市のあり方を考えるという当初の目的は達成できたと

考えられる。また、今回、名古屋の魅力景観を題材にオリジナルはがき（しおり）を作成し、アンケート回答者用の粗品としたことでアンケート回答者数も大きく増加した。回答意見を参考に今後の発展方向を追求すべきである。

また、大学の協力を得られたことにより空間の提案が入り、来場者に将来のまちの姿を考える機会を提供できた。12月5日に講評会を行い、提案者の発表と各大学の先生方による講評が行われたが、提案の趣旨や考え方がよく理解でき、大学間の学生の交流にも役立ったと考えられる。

6.2. 課題

今後、できるだけ継続的な取り組みとして大学との連携を進めることができるとよい。特に今回は、時間が限られていたため勉強会などの議論の場があまり持てなかったが、準備段階で議論の場を増やすことが望ましい。

アンケートにもあったが、模型等の提案については、提案のパネルがあるが、さらにわかりやすくするためには、ねらい等について短い文章での解説など、作成者の意図を伝える方法などの工夫が必要だと考えられる。

